床や談義　ルデヤ通信　第184号　2023 7.2

【私版 イスラエル建国史講義録】(2)

「聖書の民は坩堝(るつぼ)の中でどのように練られたのか」　臼井 勲

ー「シャイロック」とメンデルスゾーンそしてロスチャイルドー

【流浪の民、「ゲットー」の民、なぜユダヤ人は迫害されたのか】

中学で習った歌に「流浪の民」という歌曲があった。またクラシック音楽にも「彷徨(さまよ)えるオランダ人」というオペラもある。パレスチナから追われたユダヤ人はどこへ行ったのか。故国があった時代からユダヤ人は貿易、商業にたけ、世界に出て行っていた。地中海世界はもとより、遠くバビロニヤ、今日のイラン、イラクにも活躍の拠点を築いていた。ヨーロッパでは、イベリヤ半島（スペイン）に多くのユダヤ人社会があった。有名な伝道者パウロは宣教の地としてローマの次にはスペイン宣教を志していた。国が滅亡してから最も多くのユダヤ人が移り住んだのがスペインだった。そこで王や貴族など支配者たちから、その知識や技能が高く買われ、豊かなユダヤ人社会を築いて行った。この人々のことを「スファルディーム」（スペイン系ユダヤ人）と呼んだ。次に多くのユダヤ人が行ったのが、ライン河を遡って、ローマ帝国の辺境に沿って行ったドイツ地方で、そこへ移って行った人々を「アシュケナージム」（ドイツ系ユダヤ人）と呼んだ。NHKオーケストラの指揮者でピアニストのアシケナージ氏の名前はここから来ている。

ユダヤ王国が滅亡した70年頃の日本は、まだ弥生時代で当時の人口は100万くらいと想定される。ユダヤ人の人口は、ゆうに8百万を越えていた。現在の日本人口が2億2千万とすると、もし彼らが日本と同じような条件であったら、少くとも数億の人口になっているはずである。しかし現在の世界でのユダヤ人口は1,300万人であり、主な居住地は、アメリカとイスラエルである。なぜだろうかと考えるとそこには、たえ間のない流浪と迫害の歴史が続いたためだったことが分るのである。

多くの人が考え、僕も考えた、「なぜユダヤ人は、あんなにも迫害され、憎まれ、殺されたのか？」と。ユダヤ人はこの優秀ですぐれた民族なら、世界中に散っていても繁栄したはずではなかったか。

その良い例が、スペインに移住したユダヤ人の繁栄である。7世紀にイスラム教が生れ、このイベリヤ半島も支配したときも、イスラムはユダヤ教をやはり母胎としていたため、ユダヤ教に寛容で、ユダヤ人の特色が受け入れられ、彼らは豊かな繁栄を享受した。それはキリスト教がイスラムを駆逐するまで何世紀も続いたが、キリスト教の強制に応じなかったユダヤ人はヨーロッパ各地へと散らされて行った。ユダヤ人が常に迫害されたわけではない、争いのない平和な時代は疎外されても迫害されることはなかった。

少数者がいじめられ、差別され迫害されるのは戦争や災害のときである。ヨーロッパでは二つの要因が大きかった。① 十字軍 ② ペスト である。十字軍（11～12世紀）この戦争は、イスラムに支配された聖地エルサレムをキリスト教徒の国々が奪還しようとするものだったがそれは表向きの名目で、現実の目的は、文明や文化ですぐれていたイスラム諸国の富や物を求める西側の貪欲から来ていた。エルサレム進攻の前に、行き掛けの駄賃にユダヤ社会を襲い、殺し、略奪した。人が人に対して残虐な行為をするには倫理や道徳のハードルを越えないと出来ない。そのハードルを低くするには、宗教的な偏見や洗脳的な思い込みが助走となる。キリスト教とユダヤ教とは本来、母と子の関係にある。ユダヤ教が母胎でキリスト教が生れた。キリスト教の正典は、旧約聖書と新約聖書から成る。旧約で預言されたメシア（キリスト）がイエスであるとするキリスト教。ユダヤ教はそれを認めず、メシアはやがて来ると信じ、旧約聖書だけが教典である。イエス・キリストがメシア（救い主）と信じる教え（福音）は、ユダヤ人のキリスト者（12弟子やパウロ）によって、パレスチナからローマに伝えられた。最初の信徒はユダヤ人がほとんどだった。やがてローマ帝国の中でキリスト教は広がり、4世紀には、コンスタンチヌス帝がキリスト教を公認し、テオドシウス帝のときローマ帝国の国教となった。ここでキリスト教とユダヤ教の立場が逆転する。キリスト信徒もユダヤ人ではなく、ローマ人やヨーロッパ人が主な信徒になった。ユダヤ教とキリスト教との位置関係が逆転したのである。パウロの後継者（教父と呼ばれたアンブロシウスやアウグスチヌス）がローマ人やヨーロッパ人であった。彼らは旧約聖書で預言され、約束されている神の祝福の対象は

イスラエル（ユダヤ人やユダヤ国家）に向けて書いてあるのを、キリスト者、もしくはキリスト教会に向けたものであるとする解釈（置換神学）が成立する。以後、キリスト教は未開のヨーロッパへ布教されて行く。ユダヤ人と異なり彼らはほとんどが文盲であり聖書が読めない。それで絵や像による視覚教育による伝道がなされた。教会内の聖画はもとより、椅子や机や建物の飾りに至るまで、キリスト教が栄え、ユダヤ教は衰え廃れると云うメッセージを、象徴的物語やさまざまな意匠が凝らされ、視覚による、すり込みや洗脳的教育がなされていった。教会に通ううちに知らず知らずのうちにユダヤ人がキリストを十字架につけた、云ゆる「神殺し」のイメージが作られていった。それによって庶民の中に敵意から醸造されたうちもない作り話や風聞がユダヤ人攻撃に向けられた。例えば「血の儀式」"ユダヤ人がキリスト教徒の子供の生き血を取る"といったもの。それらは本来聖書の主旨でも、パウロの神学にもないものだ。彼は、異邦人（ユダヤ人でない人々）がキリスト者になることでやがてユダヤ人もそれに合流すると書いている。ローマ教会はユダヤ神学に対抗するため、ギリシヤのアリストテレス哲学などを援用して、万全の神学を打ち立てた。16世紀になると、その行き過ぎに気付き、聖書原典を見直す者が出て来て、その誤りを指摘した人々が宗教改革者ルター、カルヴァン等であった。ルターにしても、長い間すり込まれたユダヤ人像を払拭することが出来ず、最初ユダヤ人伝道に努力したが、それに応えないユダヤ人を呪う言葉を多く残した。それが後にヒトラーに利用されユダヤ人絶滅計画のよい口実に使われてしまったのである。

ユダヤ人は、小数者であり、インテリで大人しい人々だから、容易にうっ憤晴らしの対象とされ、スケープゴートにされたのだった。私たちが腹立ちまぎれに、近くに居るネコを蹴とばすのに似ている。

十字軍のときが正にそれだった。暴力団のケンカの血祭りにされたのが、ライン河沿のユダヤ人集落だった。メッツ、ケルン、マインツのユダヤ人が虐殺され略奪された。十字軍時代の2世紀間が過ぎ、町々が治った頃、今度は、コロナの先駆けのような「ペスト」（黒死病）が流行した。どこからともなく、「ユダヤ人が井戸に毒を投げ込んだ」との風聞が立ち、多くのユダヤ人が火炙りにされ虐殺された。日本でも大正12年の関東大震災のとき、井戸に毒を投げ込んだとの風聞により、多くの無辜の朝鮮人が虐殺された。なぜユダヤ人が疑われたかと云うと、ユダヤ人は掟に従って食事するため、非常に清潔に生活するため彼らだけがペストに無害だったからと言われている。ユダヤ人は、今の国が建国されるまでの1900年間、全欧洲をくまなく流浪し、時に「ゲットー」に留められ、時に「ペイル」（囲い地域）に囲い込まれた。しばらくするとまた追放された。英国は（1290－1650）の310年間、フランス（1306－1789）の480年間、スペイン（1492－近代）の400年間、ユダヤ人は追放されていた。そしてユダヤ人は、ポーランドや中欧、ロシアへと大量に流出して行った。森繁久彌のミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」は、ロシアの周囲に移ったユダヤ人家族をドラマにした物語であった。ここで皆さんがよく御ぞん知の三人のユダヤ名を挙げることで、この時代のユダヤ人の姿を見ていこう。①「シャイロック」、これはシェークスピアの「ベニスの商人」に出てくる、陰険で情け容赦のない金の亡者、客の胸肉を担保に金を貸すユダヤ人を描いて、"ユダヤ人の典型"を創出させた名である。これによってユダヤ人の誤った印象が焼き付けられた。シェークスピアが書いた英国のこの時代、3百年も前からユダヤ人は追放されていて英国にはいなかった。彼は誰かの情報を基にこの人物を頭の中で構成させた者で、ユダヤ人の本質ではない。中世の頃、ローマ教会は、キリスト者は金銭を扱ってはならず、ユダヤ人は、土地も持てず、農夫にも大工にもなれず、行商人か金貸し業しかできなかった。②「ゲットー」という狭い空間に大勢が押し込まれた。しかし後のロンドンの貧民窟とちがって、清潔と自治もいき届いていた。ドイツのフランクフルトのゲットーで古着や骨董品を扱って貴族社界に出入りし、そこから抜け出て、やがて大富豪となったロスチャイルドがここから出て来る。③「ゲットーから出よう」と云う運動を起こしたのが、有名なドイツの作曲家メンデルスゾーンの祖父、モーゼス・メンデルスゾーンであった。彼はラビの家系で教育者であった。頭脳明晰でカントなどの哲学者と交わり、ユダヤ人はゲットーから出て、ヨーロッパ人と同化すべしと主張した。彼の息子はキリスト教に改宗し、大銀行家になった。その息子がメンデルスゾーンで、彼の姉もピアニストで独自のサロンを作り、上流貴族と交流した。メンデルスゾーン一家は、「ゲットー」から抜け出て、西欧人と同化して、ユダヤ人の才能を花咲かす先駆けとなった。これは1789年のフランス革命のおかげであった。革命の理念「自由、平等、博愛」が、いっときユダヤ人に差別のゲットーを脱して、西欧人の一員として生きれる希望を与えたかに見えたが、時代が変るとその運命は、また暗転していくのである。